

読書日記

今週の筆者は

作家

津村記久子さん

＊11月6日～12月3日



■入門 都市計画(谷口守著・2014年)

森北出版・2376円

都市計画の考え方そのものについて、具体例を数多く交えながら平易に解説。都市の役割、変化する社会環境下での街づくりの指針を示す。

二〇一六年から日本のさまざまな場所にあるサッカー場の取材を始めて、それに関連する仕事が終わった後も、習慣的に国内のいろいろなところに行くようになった。

どこへ行っても楽しいし興味深い。ここに暮らしていたら自分はどこで散歩をしたり買い物をしたりするのかということを考えている。そしてここに住んでいる人たちが満足して暮らしていたらいいなと思う。日本全国を回り、海外取材もたくさんこなされている方が言うには、日本ほど狭い範囲で多様性が保たれている場所も珍しいですよ、とのことだ。

一方で、地方の商店街のシャッター街化の問題がテレビなどで取り沙汰されていたりするのを見ると心が痛む。わたしの自宅は大阪市にあるけれども、まあまあ都会ということになっているこのへんだって、シャッターの降りている店が半分ぐらいの商店街はよくある。周辺の住宅地の人々は、より中心部に働きに出て、そこで何もかも済ましてくるため、食べるものぐらしか地元で買わないので、店が閉店していくのではと思う。休みに何か買いに出るとしても、少し外れた所にある大規模な店舗に行く。そういう施設は電車で行くことはあ



＝大阪市北区で、小松雄介撮影

「本当に良い街」の姿とは

いに行くのだ。

一方で、都心の商業施設が廃業した所にマンションができて、生鮮食品も満足に買えないという△フードデザート(デザートは砂漠の意)という現象が、さまざまな地方で起こっているため、地元が空洞化してシャッター街化が生じる。本書によると、地元で食べ物が買えるならまだいい

い方で、都心の商業施設が廃業した所にマンションができて、生鮮食品も満足に買えないという△フードデザート(デザートは砂漠の意)という現象が、さまざまな地方で起こっているため、地元が空洞化してシャッター街化が生じる。本書によると、地元で食べ物が買えるならまだいい

ロール化(郊外への虫食いの開発)を食い止めようと、自動車への依存状態を問題とする本書は、バス事業が規制緩和されて自由にバス事業者が路線ごとに参入・撤退ができることによる「相対的にもうかっていった路線でもうからない路線を支える」モデルの崩

った。たとえば、人口の規模に対してどういうサービスが提供されているか(八万七千五百人の人口規模に対して博物館・美術館が存在する確率は五〇%といったようなこと)について詳細にまとめられた図や、各用途地域に対する建築物のおもな制限の表(工業地域にカラオケボックスは建てられるがホテルや旅館は建てられないといったようなこと)など、都市を見ていくうえでやがて知りたくなることが集約されている。

コストのかかる都市のス

つむら・きくこ 2009年「ボトスライムの舟」で芥川賞。11年「ワーカーズ・ダイジェスト」で織田作之助賞。

また、「都市の再構築」という章では、個人的に身近な駅前ビル群、茶屋町、うめきたといった大阪の再開発について取り上げられていても興味深い。集積の質量ばかりが良しとされて見えなくなった「本当に良い街とはどのような姿なのか」というものを改めて明瞭な形でとら直すことができる。

筆者は津村記久子、平田オリザ、西垣通、上田紀行の各氏です。